



イギリスでも40℃に達する日があったようです。偏西風の蛇行が原因だそうですが、それは北極の温暖化に起因しているとのことです。さて今号では未曾有の世界大戦末期とその後の様子を、地域の史料を中心にお伝えします。

学校・子どもたちが見た戦争 その2

昭和20年4月には連合軍は沖縄に上陸をしました。越ヶ谷地域では毎日のように空襲警報が出され、児童も遅れての登校、授業切り上げての下校も度々であったことが「越ヶ谷国民学校 校務日誌」に記録されています。当時越ヶ谷高等女学校1年生だったAさんは「戦時中、希望ということを考える余裕はありませんでした。一日一日、その時その時のことで精一杯でした。友達と他愛ないことで笑ったりすると少し気が晴れました。」と振り返っています。そういう中で、当地でも直接的に命に係わる出来事が起こりました。

越谷も戦場になった

4月7日(土)、この日は警報のために児童は13時登校でした。越ヶ谷上空に侵入した米空軍大型爆撃機B29を迎撃した日本陸軍戦闘機が銃撃されて大吉地区の水田に墜落しました。当時国民学校5年生だった人が、次のように記述しています。

◆(私は高度1万メートルでの空中戦を祖父と二人で眺めていた。)と、その時だった。西上空よりグワーっというエンジンの故障したような轟音とともに、真っ黒な煙に包まれた戦闘機がわれわれの眼前に落下してきた。その一瞬だった。私の目の真ん前から50メートルも離れていなかったろう、戦闘機のプロペラと機体の頭の部分ははっきりと見え、他は煙でまったく見えなかった。(野口隆『越谷上空の悲しみ風化せず』(御園書房)より)

この時に集められたパイロットの遺体の一部は近くの寺院で荼毘に付されました。戦後発掘調査が行われて、福井県出身の若者だったことがわかりました。

また、5月24日(木)には登戸、四条(現東町)に計143個の焼夷弾が投下されて、農家1戸が全焼しました。翌日には鷲後、大房、弥十郎に焼夷弾が投下されました。(『越谷市史 二』より)

玉音放送

8月15日(水)、早朝から何度も警戒警報、空襲警報が出されていました。Aさんは正午に自宅で玉音(ぎょくおん=天皇の声)放送を直立して聞いたそうです。その時の気持ちを次のように話してくださいました。

◆日本は神がついている国なので負けないと言われていたので、脱力感がありました。大人たちは前から負けると思っていたようです。(15日以前は)負けるということを憲兵や国防婦人会の人に聞かれると大変なことになるので言いませんでしたが。

混乱

長い戦争(満州事変から15年、太平洋戦争3年8か月間)が終わってほっとする暇もない状況がありました。空襲の激しかった所では住む家もなく、東京から縁を頼って越ヶ谷町に移ってくる人もいました。作家の野口富士男もそうでした。生きながらえて戦地から復員してきても、職がなかなか見つかりませんでした。

(1)物資の不足～救援と盗難

すでに大戦中から生活用品は非常に不足していましたが、終戦直後はその状態がむしろ悪化した所もありました。アメリカからのララ物資(アジア救援公認団体が提供した食糧、衣料、医薬品等)の配給がありましたが、人々は自らも融通し合わなければなりません。「越ヶ谷国民学校 校務日誌」(昭和20年度)には、夏から秋に児童にズック、タオル、靴下、菓子の配給があったこと、翌年3月には越ヶ谷繊維製品小売り組合から下着やハンカチの配給があったことが記されています。こうした支援があった一方では、学校からの盗難が頻発しました。(上の表を参照)

学校での盗難

- ◆出羽国民学校では(西中学校資料より)昭和20年9月10日夜半、教室床下に備蓄していた**馬鈴薯(ジャガイモ)約133kg**が盗難
- ◆越ヶ谷国民学校では(「校務日誌」より)昭和20年10月29日(盗品記述なし)昭和21年2月23日(電蓄)、3月18日(自転車)、4月26日(ピアノ布カバー)、5月11日(作業着、ズボン下、敷布、手拭い、傘、石鹸、万年筆、クレヨン等)、7月9日(ガラス40枚、布2枚)、7月25日(ガラス2枚)、8月8日(ガラス18枚)、10月1日(ガラス31枚)、10月6日(ガラス64枚)、11月1日(未遂)、11月23日(ガラス20枚)、11月28日(ガラス62枚)、12月1日(ガラス48枚)。
この後、青年団が夜に巡回してしばらくは無事。昭和22年2月10日(ガラス36枚)、2月13日(ガラス24枚)、2月21日(ガラス104枚)

こうした支援があった一方では、学校からの盗難が頻発しました。(上の表を参照)



食糧難は非常に深刻で、列車に鈴なりになって買い出しに奔走することが日常茶飯事でした。戦後まもなく越ヶ谷町で発行された文芸誌「草笛」には『買い出し女の死』という詩が寄せられています。その中には「リュックの重み からだに耐へかねて 線路に落ちぬ買い出し女」とあります。

食糧買い出しの人々
(蒲生駅 昭和22年)
(越谷市教育委員会蔵)

(2)教科書の墨塗り作業

文部省は昭和20年(1945年)9月20日、独自の判断で教科書中の削除または取扱い注意箇所の指示をしました。(第1回指令)これに基づいて行われたと思われる浦和での文部省「新教育方針講習」(11月21日)に参加した出羽国民学校長の講習メモには修正・削除の基準として次のようになっています。

◆国防、軍備の教材を省く ◆戦意昂揚教材を省く ◆国際間の和親を妨げるものを省く ◆(終戦となった)現実と遊離しているものを省く ◆終戦詔書に鑑みて不適当なものを省く(西中学校資料)

翌年1月には第2回指令が出されました。これは日本を占領管理するGHQ(連合国軍総司令部)の意向を受けた内容で、皇室や神道、歴史的戦記物を省くように指示されました。(菅修一「国民学校「初等科国語」五～八の墨塗り教科書の実情について」『花園大学文学部研究紀要第48号』2016.3所収)

このような教科書墨塗りを、当事者はどのように感じたのでしょうか。越ヶ谷高女1年生のAさんは「なにそれ・・・という感じで、それまでダメなことを教わっていたのかと、世の中(それまでの仕組み)への不信感がありました」と語っています。墨塗りをさせた教師の方では『第1頁の2行目から5行目まで墨で消してください』そう言った時、わたしはこらえきれずに涙をこぼした。(中略)こうして、墨を塗らさなければならないというのは、一体どういうことなのかとわたしは思った。」という人もいました。(三浦綾子「道ありき」新潮文庫) この二人の言葉は戦争では親しい人を失った悲しみだけでなく、自己の在り様を傷つけられることを表しています。

墨塗り教科書(初等科国語五)
(新庄ふるさと歴史センター所蔵)



墨塗り部分は以下の俳句でした。(一部)

(菅修一前掲論文による)

「十九 動員・動員の第一夜なり明けやすき
・敵前に上陸すなり秋の雨
・突撃を待つ草むらに虫すたく」



昭和23年頃の教科書(原田家文書)

新生日本へ

(1)新しい教育の始まり

前述の昭和20年11月の「新教育方針講習」(西中学校資料)では次の事が伝えられました。 ◆教育の本義:①終戦詔書 ②ポツダム宣言・GHQの指令 ③文部省の指示 ④国民の现实生活に即応した策 ◆今後の教育:①軍国主義の払拭 ②個性発達・自由尊重 ③科学教育振興 ④勤労教育強化 ⑤女子教育刷新 この方針に基づき、同年12月には修身、国史、地理の授業が停止され、代わって「くにのあゆみ」という歴史教科書が編集されました。戦前の歴史教科書は「神代」から始まり

りましたが、「くにのあゆみ」は歴史学の成果に基づいて「石器時代」から記述されています。「越ヶ谷国民学校 校務日誌」によると、昭和22年1月には2日間にわたって先生方が「くにのあゆみ」の読み合わせをしています。

(2)人間性回復への想い

昭和20年の年末頃から、それまで抑えられてきた人間性を一気に爆発させるような取り組みが湧きだしました。

①青年文化連盟の活動・・・越ヶ谷国民学校の講堂や教室を夜間や休日に借りて、英会話、演劇、音楽、弁論などのサークルが活動しました。昭和21年度にはのべ101回、翌年度にはのべ71回行われています。「校務日誌」より

②文芸誌『草笛』発行・・・有志の越ヶ谷町文芸協会による文学活動でした。



「草笛」(昭和23年8月号)
(越谷市教育委員会蔵)

(3)心に残る先生

世の中への不信感はあるとしても、越ヶ谷高等女学校の先生方と生徒との関係は以前と変わりなく信頼関係がありました。昭和20年8月末、高等女学校のある先生が新しい日本を築くために大切なこととして、生徒に次のことを話してくださいました。①仲よくすること ②助け合うこと ③勤勉であること ④信用を得ること。今年89歳の教え子たちは、この言葉を今もなお胸に抱えています。

パネル展

「越ヶ谷への行幸・行啓と埼玉鴨場」

開催中(9月4日迄)

宮内庁宮内公文書館と春日部市郷土資料館共催「埼玉県東部と近代の皇室」の連携展示として、大間野町旧中村家住宅でパネル展を行っています。